

19世紀末のシンガポールにおける葬送と火葬に関する議論

著者	高悼 健太
雑誌名	論集
巻	43
発行年	2016-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130343

19世紀末のシンガポールにおける葬送と火葬に関する議論

高 棹 健 太

はじめに

シンガポールでは現在火葬率が8割に迫り、遺骨を納骨堂へ埋納することが一般的となっている。シンガポールは、公営火葬場ができた1962年から急激な火葬化を見せており、各民族の持つ葬送に関わる慣習は、火葬化、そして埋葬地を公営墓地に限定する都市政策によって大きく変化している。かかるシンガポールの葬送の変化、そして火葬化について、先行研究では1970年代からの動向に着目したものが多く、本論が対象とする19世紀末に見られた海峡植民地政府と華人たちによる対話は看過されてきた。しかし、19世紀末の埋葬や墓地、そして火葬に関する論議には、「伝統的」、「宗教的」な葬送文化を守るため政府との対話をもとうとする華人の姿が有り、1952年にシンガポールの葬送制度の方針が決定された「埋葬と墓地に関する委員会」(The Committee Regarding The Burial And Burial Grounds¹)での話し合いに見られる政府と各民族との対話に通ずるものがある。それは、土地問題や公衆衛生問題を解決し、近代化を進めようとする政府側と、近代化の波にたいして自分たちの文化や慣習を守ろうとする人々との対話であり、土地の少ないシンガポールにおいては政府を悩ませてきた重要な課題であった。本論で扱う19世紀末における葬送制度にかかわる華人と政府の対話は、シンガポールにおいて長く続く葬送制度についての議論に通底するものである。それは、人口の大多数を占める華人の葬送文化と近代化を目指す政府の方針の相克、そして譲歩の有り様である。

本論で対象とする事例は、19世紀末に見られた墓地や埋葬方法を規定した法案(The Burial Bill)の制定にかかわる論議、そして火葬の必要性に関する政

1 「埋葬と墓地に関する委員会」(The Committee Regarding The Burial And Burial Grounds)では、遺体処理の方法として火葬を促進すること、そして公営火葬場の設立をめざすことが決定された。この会合は1950年から1952年にかけて5回開催され宗教団体や民族団体の代表を招き、様々な見地からの意見を汲み取ろうとする働きが見られた [RCRBBG 1952]

府高官たちの討論である。主に、1887年の墓地や埋葬に関する法案（The Burial Bill）について論議した立法評議会（Legislative Council）、そして、火葬導入について海峡哲学会（Straits Philosophical Society）で話し合われた事例を用いて、19世紀末のシンガポールにおいて植民地政府と華人たちがいかなる対話をおこなっていったのか、そしてどのように自身の文化や慣習を解釈し、説明していったのかを見ていきたい。それは、土地問題と公衆衛生の問題に対処し、近代化を目指す植民地政府に対し、埋葬や墓地に対する慣習を重視する華人たちの対話である。その中でも、華人系の居住民の代表者となったシンガポールで生まれ育ち、英語と華語のバイリンガル教育を受けた海峡華人²（Straits Chinese）の働きについても着目していきたい。

1. 現在の墓地制度と火葬率

まず、シンガポールにおける現在の墓地制度と火葬率について触れていきたい。現在、シンガポールの現在の火葬率は、79.26%となっており、国民の大多数が火葬を選び、火葬が主要な葬法として受け入れられている。現在は8割に迫る火葬率のシンガポールは、アジア諸国・諸地において、日本、台湾、そして香港に続く、アジア第4位の火葬率となっている [The Cremation Society of Great Britain 2016]。その一方で、土葬を行うことができる埋葬地は、シンガポール西北部にあるチョアチュウカン墓地（Choa Chu Kang cemetery）のみであり、現在のシンガポールでは、土葬や埋葬地を選択することは困難となっている [National Environmental Agency 2016]。かかる環境の中で、シンガポールでは、各民族集団が持つ慣習や信仰を、政府の方針に合わせ、変容させながら維持していくことになる。

シンガポールの急激な火葬化について、社会学者でありシンガポールにおける宗教の変容について調査を行ったタム・ソン・チー（Tham Seon Chee）は、「シ

2 海峡華人（Straits Chinese）とは、一般的に、数世代にわたってマラヤに定住した結果、中国との関係をすでに喪失し、現地志向の貴族意識を持ち、衣食文化や言語においてマレー化、あるいは西洋化された華人とされる [篠崎 2001:72]。海峡華人と同様の意味で用いられる言葉に、ババ（Baba）、プラナカン（Peranakan）などの呼び名がある。プラナカンとは、マレー・インドネシア語で「子」を意味するアナック（anak）から派生した語で、「外来者の現地生まれの子」という意味を持つ [山本 2008]。

ンガポール華人のあいだでのもっとも根本的な変化とは、土葬にかわって火葬が次第に受け入れつつあることである。」と指摘しており、火葬化が進む背景には、「葬送ないし埋葬の儀礼についての伝統的な理念や信仰の影響力が弱まってきたこと」、そして別の側面として「今日のシンガポールでは埋葬の場所を確保することが困難となり、経済的負担も大きい」という事情があると説明している [Tham (設楽訳) 1984 (1989) : 96]。

華人の信仰について社会学的研究を行っているトン・チー・キョン (Tong Chee Kiong) の華人の火葬率に関する調査によると、人口の大半を占める華人の火葬率は、1965年以前では10.2%と非常に低く、1966～1975年では38.3%となる。1988年になると、火葬を選択する者が68.1%となり、火葬を行う割合が、土葬を上回るようになる [Tong 1988 : 34]。1965年以前の火葬率の低さ、そしてその後世界でもトップクラスの火葬率の高さに上昇するようになった要因はいったいなんだったのか。トンは、シンガポール政府の火葬を促進した政策が、三つの要因により功を奏したとしている。一つは、土地不足のシンガポールでは、火葬が最良の遺体の処理方法であると説得したこと。二つ目は、納骨堂などの、効率的でシンプルな魅力的な選択肢を提供したこと。そして三つ目は、土葬に固執する人々には埋葬地を提供したことで、華人らが火葬を強要されているように感じる事がなかったことである。トンはこれらの要因が、華人の火葬率を押し上げたとしている [前掲書 :34,55]。

たしかに、トンの挙げた火葬率上昇の要因は、華人の葬法が短期間に土葬から火葬へと変容したことを説明し得ているようにも見える。しかし、かかる政府側の働きかけは、決してシンガポールにおいて火葬率が上昇する1980年代特有のものではない。すでに20世紀初頭から続く華人組織と植民地政府との対話の中で言及されている論点である [The Singapore Free Press and Mercantile Advertiser 1913/12/9]。そのため、シンガポールにおいて火葬が人々に広く利用できるようになる施設面の拡充にも着目せねばならぬ。それは、他の火葬率の高い各国、日本やイギリスに比べ、公営の火葬場の建設が大きく遅れていたことも考慮に入れる必要がある。なぜなら、公営火葬場の建設そのものが華人たちから理解が得られず、建設を行うことができなかった経緯があるからだ [RCRBBG 1952, The Straits Times 1939/4/11]。シンガポールにおいては初の

公営の火葬場であるマウントヴェロン火葬場³ (Mount Vernon Crematorium) の建設は1962年を待つことになる。この公営火葬場ができるまでシンガポールでは、仏教寺院や日本人墓地に作られた火葬場などで火葬が行われていた。公営火葬場建設の道のりは長く、1890年頃から見られる火葬と華人の信仰との議論を経てのものだった。それでは、なぜ火葬場建設が遅れたのだろうか。それは、葬送についての政策を決定する過程において、人口の大多数を占める華人の意見を無視することができなかったからである。本論文では、シンガポールの墓地政策、そして火葬についての議論を通して、華人の葬送についての思想を概観する。

2. シンガポールにおける急激な人口の増加と墓地問題の顕在化

1819年にスタンフォード・ラッフルズ (Sir Stamford Raffles) がシンガポールの戦略的重要性を認識し、領有を開始したことがシンガポールの開発の始まりである。イギリスによる植民地保護政策の下で貿易が栄え、政府の干渉を受けない自由企業体制が急成長し、シンガポールには文化の異なるさまざまな地域から多くの人々が集まってくるようになった。シンガポールでは、労働力として多数の華人やマレー人を移民として受け入れるようになる。人口統計を見てみると、1824年の統計では、総人口10,683人、華人の人口は3,317人、マレー人の人口は6,431人となっており華人の人口はマレー人の人口を下回っていたが、1830年代中頃には、マレー人を抜いて華人がシンガポール最大の民族集団となった。1849年には、総人口52,891人となり華人が27,988人で人口の半数を超える。25年間で人口が約5倍になるなど、急激な増加を見せた。本論で対象とする19世紀末を見ると、1891年は総人口が181,602人となり、華人が121,906人と割合が高まり、人口の約7割が華人となった [Saw 1999:9-10,47]。

上記のように、大量で継続的に移住者を受入れていった背景には、貿易・商業の繁栄にともなう貨物の荷揚げ積み込みなどに携わる労働力を必要としたこと、都市建設のための土木事業の労働力需要、またプランテーションの労働力

3 1962年に設立されたマウントヴェロン火葬場は、42年間の操業を経て、2004年に閉鎖された。1976年には、火葬場内に納骨堂が作られた。この地域は、開発のために区画され、遺骨は新たに設立されたマンダイ火葬場 (Mandai Crematorium) の納骨堂に移されたることになった [National Environment Agency 2016]

需要などが挙げられる。また、イギリス及びシンガポール当局が、19世紀の終わり頃まで、移住の自由を認めていたことが、移住民の流入を促進した〔大西1980:12〕。

人口の急激な増加にともない居住地や商業地の確保が困難になることが予想されるとともに、人口密集により公衆衛生の悪化が問題視されるようになる。かかる環境においては生者の商業・居住環境のみならず、死者が埋葬される墓地や葬送方法が生者に与える影響も着目されることとなる。それは、移住者の墓地設立が、もともと少ない土地を奪っていること、そしてその墓地が与える生者の健康への悪影響を不安視するものであった。

増加する華人の墓地に関して、1841年から1853年にシンガポールに滞在し、シンガポールの地図を作成した測量技師ジョン・ターンブル・トムソン（John Turnbull Thomson）〔Wilbert 2015:98-99〕は、19世紀半ばのシンガポールの様子を以下のように描いている。

華人の墓地は、とても多く、広い面積を覆っている。墓所は、一族にとって細心の注意を払う対象である。墓地は、それぞれが所属する氏族の長の監督のもとにある。(中略)華人の墓地が急激に増えているため、シンガポールは広大な華人の共同墓地となってしまうようだ〔Thomson 1865:282〕。

と、華人墓地の増加により、土地を逼迫しているのではないかと、この所見を述べている。また、トムソンが「墓所は、一族にとって細心の注意を払う対象である」というように、華人にとって墓地は非常に重要とされるものであった。それは、以後の墓地政策に大きな影響を与えることになる華人の信仰、とりわけ風水信仰、そして氏族等の運営する個人墓のあり方の一端をトムソンが描写したものでもあった。華人にとって、墓は一族とその死者を結ぶものであり、死者の安寧を願うことで、一族の人々に利益があると考えられているため、墓所の選定は風水から選ばれていた。つまり、墓をいかなる場所で建てるのかも、重要な条件となっていたのである。

19世紀後半には、シンガポールのいたるところにある華人墓地を問題視し、墓地の設立を管理することで、生者の生活、商業のために土地を有効に活用するべきであるという議論が政府機関において行われるようになっていく。

3. 1887年の埋葬に関する法案（The Burial Bill）における華人との論議

3.1 立法評議会での埋葬に関する法案（The Burial Bill）の提出

急激な人口の増加と、それによる墓地の増加から、将来的には商業用、居住用に土地が不足するものと考えられ、墓地設立を制限することを目的とする「埋葬に関する法案（The Burial Bill）」が、立法評議会⁴（Legislative Council）に提出されると、華字紙『叻報』をはじめとする新聞等で大きく報じられた⁵。この法案では、墓地の立地を管理し、そして許可制度にすることで、道路や建物の立地を確保することを目的とし、墓の深さ、埋葬地の適正な位置について規則を設けることで、公衆衛生の管理、人々の健康を確保することができると考えられた。

この法案では、まず、許可を得ていない墓地を使用することできないと定められており、非許可の土地に対する罰則が設けられるとされていた⁶。また、総督には、許可を得ていない土地に埋められた遺体を撤去する権限があり、継続的な違反に対する罰則を科す権限を与えるものであった [PLCSS 1887 August B91-B92]。

3.2 埋葬に関する法案（The Burial Bill）に対する華人の反論

かかる法案は華人からの反発を受けることになる。そして華人たちの意見の代弁者となったのは、華人の評議会議員であるセア・リアンセア（Seah Liang Seah 余連城）であった。セアの立法評議会での意見を見る前に、彼がいかなる人物であったのか、彼の略歴と当時の立法評議会での華人について見てみよう。

4 立法評議会（Legislative Council）は、1867年に設立された。立法評議会には、植民地に対して、法理を制定する権限が認められていた。立法評議会は、行政参事会（Executive Council）とともに総督を補佐するもので、総督が法令を制定する前にそれを諮問する場であった。立法評議会は、行政参事会の官職メンバー（Officials）と民間から総督が任命した非官職メンバー（Unofficials）によって構成されていた [Turnbull 1989: 78-80]。

5 『叻報』（Lat Pau）は、1881年にシンガポールで刊行された最初の華字紙であり、1932年まで長期に刊行された。この墓地に関する立法評議会の議論は連日報道された [『叻報』1887/8/20, 24]。

6 新しい許可を得るまでは、現存する墓地を使用することができるという条項も設けられる予定であった [PLCSS 1887 August B91-B92]。

セア・リアンセアは1850年にシンガポールに、19世紀のシンガポールを代表する裕福な華人商人であったセア・ユウチン（Seah Eu Chin 余有進）の次男として生まれ、華語を家庭教師から、英語はセント・ジョセフ学院（St. Josephs Institution）で学んだ。彼は父親の秘書を務めていた。セアは、1883年1月に総督フレデリック・ヴェルド（Governor Sir Fredrick Weld）によって立法評議会の一員に任命された。彼の任命された当時には、立法評議会に華人コミュニティを代表するものは誰もおらず、彼の任命は華人コミュニティを満足させるものであった [Song 1967:212]。こうした立法評議会の状況のもと、セアの意見は華人を代表するものと見なされ、大きな注目を集めることになる。

1887年にこの埋葬に関する法案が提出された際に、セアは、この法案の審議の延長を申し入れた。そして、法案に対する華人の意見を述べたのだった。内容は、以下の通りである。

私は、この法案の幾つかの条項が、華人コミュニティの関心ごと、とりわけその中でも社会的に地位のある者たちに深刻な影響を与えると考えている。よく知られている通り、華人たちは、この海峡植民地がインド政府のもとイギリス領になるとすぐに、この地にやってきたのだ。現在では、この海峡の不動産のほとんどを華人が所有しており、それは、公有地管理局や自治体の報告書からも証明されている。そのため、私は、法律を作成するにあたり、華人コミュニティの心情に幾らかの考慮を示すべきであると考え。イギリスの法律が公正で公平であると考えているのだから、華人、とりわけ社会的地位が高い者たちの多くの人々、そして初期の入植者たちの子孫らは、すでに家族たちと定住している。この法案の条項は個人的な墓地の抑圧を目的としている。こうした対策は、彼らの祖先のための個人的な墓地を持つという上流階級の華人から愛されてきた慣習に、疑いなく、影響を与えるものである。[PLCSS August 15th]

上記の引用からわかるように、墓地に関する法案の制定は華人の大切にする墓地や埋葬にまつわる慣習を侵害するものであると、セアは反論したのである。セアは、墓地に関する法案の提出を華人全体の墓地問題と捉えているだけでなく、主に華人の富裕層の墓地の設立に影響を与えるものであると判断していることも重要である。これは、後述する華人の富裕層による個人墓が、風水信仰による吉地を求めることから、より良い立地を探し、シンガポールの街中に墓

地が遍在していったその様子を考慮した意見である。

海峡植民地政府が法案制定に向かう一方で、華人たちの心情を考慮されるべきものであるとの意見もみられるようになる。それは、この墓地に関する法案は華人の慣習や儀礼、そして彼らの聖なる空間の管理に対する侵食を表すものであると、華人たちが解釈し、大きな反発が生まれるのではないかという危惧であった。法案についての新聞報道でも、華人たちの反応について、「彼らは、昔ながらの墓地使用への妨害を許すことはない。[Straits Times Weekly Issue 1887/8/24]」と報道した。そして、華人による暴動や、暴力による脅威について噂がひろまるとともに、華人たちは植民地政府に働きかけ、法案の採決が行われたのであるが、延期されることが決まった。

4. 墓地管理への忌避—風水と個人墓地—

この法案にたいするセア・リアンセアの要求は、華人の墓地に関する信仰・慣習への配慮であった。とりわけ、華人の富裕層の墓地管理に対する理解を求めるものであったと言えるだろう。そして、植民地政府が華人の暴動への危惧や、華人たちの働きかけにより、法案の採決が延期されることになったのである。この延期という結果に至ったのは、それだけ、華人が墓地の設立に関する自由を求めていたこと、もしくは、植民地政府が華人にとって墓地の設立の自由が重要であると解釈していったためであると考えられるだろう。

それほどまでに華人、そして植民地行政に影響を与えた華人の墓地に関する信仰がいかなるものであったかを見ていきたい。

それには、華人社会で広く信仰されている風水が関係している。風水は二種に分かれる。それは、人間の生活環境の判断を行なう「陽基風水」、そして祖先、つまりは死者の生活環境の判断を行なう陰宅風水である。「陽基風水」には都市・村落・家屋などの人間生活の造形空間の判断が含まれるが、風水では、「陰宅風水」により判ずる墓地環境が最重要なものとなっている[渡邊 1994: 193]。オランダ人の中国思想学者のデ・ホロートは「事実その最初の胚胎は、死者に対する尊崇の念から生まれたものであり、この尊崇の念はすでに遥かな昔において中国人固有の宗教であったのである。[ホロート 1986 (1964): 76]」と論じている。このように、風水は元来、死者の埋葬や墓をいかに行うかが主要な目的であり、中国だけでなく、海外に移っていった華人においても、その重

要性を保ちながら、アジア各地に墓地を建設していった。では、墓地設立に適した土地とは、如何なる場所をいうのであろうか。一般に、風水信仰において、埋葬が好まれる土地は、左（東）に青龍砂、右（西）に白虎砂という小高い丘に挟まれ、前方には力強く隆起した男性的な土地、後方には緩やかに起伏した女性的な土地の結びついた場所が好まれる〔寺本 2006：220-221〕。こうした風水信仰において吉地とされる土地を求め、土地を購入して墓を設立していった。

なぜ墓地に関わる風水が重要なものであったのか。村山智順は、この陰宅風水の信仰について「先人を良好なる墓地に葬すると否とは直ちにその子孫の盛衰に重大な影響を及ぼすものである〔村山 1931（1979）：11〕」とし陰宅風水の概念について以下のようにまとめている。

墓地は父母の宅地であり、住宅はその子孫の居宅であって、父母と子孫との関係は恰かも根幹と枝葉との如きものであるから、枝葉の繁茂を計らんとせば、その枝葉そのものに手を入れるよりも、寧ろその根幹に培う方がその目的を達するに確実にして速やかなると同様に、枝葉に等しき子孫の住宅から子孫の生活に寄与する効果よりも、根幹に相当する父母の安宅すなわち墓地からの影響が、より直接であり迅速であると云うからである〔前掲書：12〕。

風水信仰においては、祖先が埋葬される墓地を吉地に建てることが子孫の繁栄につながるものであるとされているのである。風水信仰から、墓地をどの場所に設立するかが、重要なものとなっていた。

また、植民地政府において、なぜ華人の墓地の移設が暴動などという暴力と結びつけ語られたのか。近代的な風水研究の嚆矢であるエルネスト・アイネルが記した *Feng-Shui: or The Rudiments of Natural Science in China*（『風水－欲望のランドスケープ』）では、1849年にマカオの総督アマラルが、道路建設を行なうため中国人の墓の位置や方位に手をつけた時に、中国人により殺害された事例を記している。かかる風水の影響力の強さについてアイネルは、「風水は、中国人の最低の階級をけしかけて卑劣な殺人を犯させる。また、貿易や文明のさらなる発展に対して政治家達が否をとなえるときの、申し分ない言い訳としても利用される。〔アイテル 1999（1879）：14〕」と述べており、シンガポールにおいて墓地政策を進める際にも、華人による暴動が起きることの可能性を考慮せざるおえない問題であったと考えられる。

5. 1890年代における火葬に関する議論の発生

墓地に関する法案の提出によって、華人の墓地や埋葬に関する慣習や信仰が、政府によって扱われるようになり、新聞等で埋葬地の問題が取りざたされている一方で、葬法を土葬か火葬かのどちらかにすべきかという問いが現れていく⁷。それは、土葬における議論が墓の建設による土地の「無駄遣い」、将来有効に土地を利用できないのではないか、という危惧から発せられたものであるのと同じように土地問題や、公衆衛生上の問題から発せられたものである。

火葬についての議論や講義は、当初、植民地政府の官僚や知識人によって行われたものであり、直接的に立法、そして火葬炉の建設を目指して行われていたものではないと考えられるが、シンガポールの埋葬や火葬場建設の方針を決定付けた1952年の「埋葬や墓地に関する委員会」(The Committee Regarding The Burial And Burial Grounds)での議論に通ずるものがあり、火葬や埋葬がシンガポールにおいて如何なる議論、そして解釈をされてきたのかを知るためには、重要なものである。本節では、火葬に関する議論の発生と、その内容について触れ、シンガポールにおいて火葬を取り入れるべき利点について政府官僚がいかに捉えていたのか、そして華人を代表した人物がいかなる反論を行ったのかを見ていきたい。

5.1 政府官僚たちによる火葬の議論

ここで、1890年代における火葬の議論について見ていきたい。火葬を公衆衛生および、華人の思想からの目線で論じる場となったのは、海峡哲学会 (Straits Philosophical society) であった。

海峡哲学会⁸は、1893年3月5日に、シンガポールの軍司令官であったチャー

7 シンガポール・ディベートング・ソサエティ (Singapore Debating Society) では、1879年6月25日に「火葬は、現在行われている土葬よりも好ましいか」について討論会を開いている。討論結果は、火葬に賛成するものが21票、土葬に賛成するもの12票となっており、火葬を行うべきであるとの結果となっている [Straits Times Overland Journal 1879/6/19, 1879/7/2]。討論では、最高裁判所の事務弁護士を務めたジョナス・ダニエル・ヴォーハン (Jonas Daniel Vaughan) が、火葬の利点を説明した。内容は、公衆衛生を中心に火葬の利点を述べたものだった。かかる討論内容は、新聞でも取り上げられており、海峡植民地の知識人たちにとって火葬が討論の論題となるほどに、関心が高く、意見のわかるものであったことがわかる。

8 海峡哲学会は、1893年3月5日に設立された。彼らの活動は、植民地シンガポールの

ルズ・ウォーレン（Sir Charles Warren）によって設立された。会員は、植民地政府の官僚や学者など、主に行政に携わった者を集めたエリートによる集団である。海峡哲学会の会員をみると、初期会員には3名の立法評議会のメンバーが含まれており、その後も、初期会員の中で5名の会員が立法評議会に加入されることとなるなど、植民地政府との関係が深い会員が多いことも特徴である⁹。彼らの議論は、哲学から政治、そして科学などの分野に及ぶ幅広いものであった。

海峡哲学会を設立するにあたり、設立者のウォーレンは、彼ら会員の思想は多分に地理的な条件から影響を受けるものと考えており、実践的で応用可能となる現地の知識が蓄えられるという実用的な機能を持っていた。この「現地の知識」を提供する人物として、後述する海峡華人の中国哲学者タン・テックスーンがいた。

海峡哲学会の特徴は二つある。一つ目は、海峡哲学会の特別な社会は、植民地の支配的な権力構造の中の人々が会員として含まれていること、そして二つ目は、その権力構造が、大英帝国に関連する強大なネットワークの一部となっていることである。海峡哲学会は国際的なエリートと現地の知識を媒介する場となっていた。

1893年に刊行された機関紙の創刊号では、火葬について論文が寄稿されメンバーが討論を行なっている。ここで、医学博士ディビット・ギャロウェイ（Sir David Galloway）と華人出身の哲学者タン・テックスーン（Tan Teck Soon）の論文から、彼らの火葬についての意見をみてみたい。とりわけ、火葬を忌避する華人の意見は、「伝統的な観点から」、「風水信仰によって」などと大まかに説明されることが多いが、タンの論文はそうした華人の思想を詳述しており、

文化的、知的生活に発展的な影響を与えたものと考えられている。この団体の構成員の大半は、行政を担う知的エリートであった。会員の条件であるが、まず会員は15名と定まっており、欠員が出た場合は即座に補充されることとなっていた。シンガポールに在任していること、そして大学を卒業していることが必要とされた。会合は、たいいていの場合毎月第二金曜日もしくは土曜日に催され、各題目について討論、そして論文が提出されることとなっていた [Straits Philosophical Society 1913]。

- 9 海峡哲学会の創立時の会員を例に挙げると立法評議会のメンバーであったトーマス・シェルフード（Thomas Shelford）は私的諮問機関に属しており、ジョン・ウィンフィールド・ボンサー（John Winfield Bonser）は海峡植民地の裁判長であり、政府の官僚の中でも高い地位にある人物が会員となっていることがわかる [Jose1998: 30-31]。

火葬を忌避する華人の心情を描き出しているものと考えられる。

まず、科学側、公衆衛生を論点とする論客として海峡医学協会 (The Straits medical Association) の会長等の海峡植民地の医学に関わる要職を歴任したディビット・ギャロウェイ¹⁰は、医学博士としての見地から、公衆衛生上の利点について述べている。

ギャロウェイは、「火葬の公衆衛生的側面」(1898 (1893) “The Sanitary Side Of Cremation”)において、土葬は広く行われている葬法のうち最も不衛生なものであるとし、土葬では、分解される途中で、遺体から腐敗した物質が空中に撒き散らされ、空気を汚染する危険があると説明する。土葬では、伝染病の流行時、遺体を媒介に感染する危険が有り、火葬を行うことで、そうした危険性を排除することができる¹¹と述べている [Galloway, 1898 (1893) 40-41]。

かかる火葬を促進する医学的・科学的意見にたいして、タン・テックスーンは、「華人の見地から見た火葬」(1898 (1893) “The Chinese View of Cremation”)と題した論文を提出した。

タン・テックスーン¹¹は、1859年にシンガポール生まれの海峡華人の哲学者である。彼は、ラッフルズ学院 (Raffles Institution) で学び、半島生まれの華人として初めて、ギューシー奨学金 (Guthrie scholarship) を受けた。彼は、自分の研究を進めるため、廈門に向かい、英華書院 (Anglo Chinese College) で中国思想を学び、帰国後、シンガポール政府に勤めた。この時代のリム・ブーケン (Lim Boon Keng 林文慶) などの海峡華人の知識人と違い、大学進学の際にイギリスを選ばず、中国での進学を選んでいる。こうした彼の学問的背景が、

10 ディヴィット・ギャロウェイ (Sir David Galloway) は、スコットランドに生まれエディンバラ大学で医学を学び、1885年にイギリス領マラヤを訪れると、ジョホール王室の信頼を得て、スルタンであったアブバカル (Sultan Abu-Baker) の主治医となった。1890年には、海峡医学協会 (The Straits Medical Association) の会長を務め、1894年には、イギリス医学協会 (British Medical Association) のイギリス領マラヤ支部の会長となった。1903年には、立法評議会の非官職メンバー (Unofficials) に任命され、1914年まで務めると、1921年から1929年にかけて、行政参事会のメンバーで初めて非官職メンバーとなった。彼は、1924年に、ナイト爵位を受けた [The Strait Times 1935/9/16, 1939/5/14, Sunday Tribute 1938/5/8]。

11 タンは、海峡華人キリスト教徒協会 (the Straits Chinese Christian Association) の一員であり、シンガポールで初めて、華語と英語などの語学や、中国の歴史を労働者に教える夜学を開いた人物である。半島の海峡華人の改革運動 (the straits reform) の先頭を走った人物で知られる [Frost 2003: 40]。

華人の思想の専門家として海峡哲学会に招かれた理由となっている [Frost 2003: 40-42]。

タンの意見を見てみよう。タンは、火葬について、公衆衛生の面や、実用的な見地については検討するつもりはないとしながらも、華人の立場から火葬に関わる嫌悪感の正体についての考えを述べている。タンは、華人にとって火葬への受容における最も大きな障害は、宗教的、情緒的、そして哲学的な問題であるという。彼の言説について、以下に要点をまとめていく。

まず、華人の信仰における主要な宗教、仏教、儒教と道教、について言及している。仏教については、華人の火葬嫌悪とは無関係と述べている。その理由は、中国においても仏教僧は、死後荼毘に付されるのが一般的であり、この慣習はインド仏教が中国に伝えられたことにより、広まったと説明している。

靈魂の転生に関する強い信仰は、火葬の需要を擁護するものであった（中略）、靈魂はその一時的な住居を移動することが可能で、その単なる殻である肉体の完全な処分は比較的重要なものとは考えられなかったのである [Tan 1898 (1893):45]。

しかし、かかる思想は、儒教や風水などの信仰によって打ち消されていく。タンは、儒教や道教の信仰が、火葬の需要に大きな障害となっていると説明する。その一つは、身体の神聖性である。「華人の哲学では、人は創造物ではなく、天と地、そして人が三位一体と考えられ」おり、三字経では「人の性はもともと善である」とともに、「天と地、両方の性質を持ち合わせた」存在であると描かれる。そのため、

彼（人）は、時には、彼らの子孫である。天は靈魂の同義語であり、父である、地は自然の同義語であり、母であると言われる。それゆえ人の身体は、神聖であり、そして、その究極の処理方法は無傷（intact）で、厳密に施されるべきである [前掲書:46]。

かかる無傷を求める思想は、家族関係、孝の思想に関する儒教の教えが火葬の需要を阻害することに繋がっている。それは、孔子が死者の体を消滅から保護するために、厚い棺を用意したことからも、死者の体を消滅から保護する必要性を伝えているという。また、火葬を忌避する間接的な要因は、風水であると指摘する。風水では、自然は善と悪の影響の中に息づいており、墓地のための土地の形状や、土地の性質などは、埋葬の適正な時間によって影響をうけ、

幸福をもたらす組み合わせが発生するという。風水の思想は、死者の魂をなだめるだけではなく、慣習を守る者に、富、名誉、そして子孫を約束するものである。

華人が火葬を忌避する理由を挙げる一方で、タンは、火葬が受容される可能性を示唆していることも重要な知見である。

火葬は、骨や頭蓋骨が、残りの体の部分が消滅したのちに、無傷 (intact) で残るように調節されたときに、華人の間で普遍的な火葬への順応が期待できる [前掲書 :49]。

このように華人の葬送に関する思想には、遺体が無傷であることが重要視され、火葬が骨や頭蓋骨を無傷で保つことができるようになると、華人の骨を保護しようとする思想と公衆衛生は共存できると述べている。

かかる華人の埋葬に関する思想を述べたのちに、タンは伝染病の流行時を除き、華人に埋葬の自由を与えることを嘆願するとともに、華人が決して合理的な判断ができない訳ではないと主張している。最後にタンは、「華人は保守的でも、進歩に不関心でもない、火葬の支持者は、火葬の利点や有用性を華人に説くことを、少しも絶望する必要はない」と述べ、華人が火葬を受容する可能性を示唆するのである [前掲書 :50]。

タンのこの論文は、のちに『海峡華人雑誌¹²⁾』(*The Straits Chinese Magazine*)にも掲載された。この雑誌は、海峡植民地政府生まれの華人を対象とした雑誌であり、中国を離れ生活する華人に、本国の慣習や文化を伝えることを目的としたものであった。タンの論文が『海峡華人雑誌』に掲載されたことは、火葬を如何なる思想において解釈するのかを海峡華人たちに伝えるものであったことも重要な視点である。

12 『海峡華人雑誌』(*The Straits Chinese Magazine*) は、1897年3月に創刊された。この雑誌は、海峡生まれの華人を対象に発行されたもので、創刊に関わったのはリム・ブンケン (Lim Boo Keng) とソン・オンシアン (Song Ong Siang) といった海峡生まれの知識人であった。リム・ブンケンは、この雑誌を刊行する理由について、海峡植民地に生まれ育った華人の人々と、中国で生まれ育った中国の人々とは、同じ慣習に従い、同じ服装を着ていたとしても、その思想や観点は異なっていると考え、海峡華人に中国の文化や中国の歴史などを紹介することを目的として刊行されたものであると説明している [The Straits Times 1897/3/31, 1987/12/8]。

5.2 海峡華人に対する火葬についての講義

海峡哲学会での討論がなされた後、翌年の1894年には、華人のキリスト教徒を対象として火葬を講義された事例がある。華人キリスト教徒協会（Chinese Christian Association）での火葬についての講義である。この講義では火葬について、以下のように説明している。

火葬は、古代では世界中いたるところで見られる慣習であり、もっとも古い遺体の処理方法である。火葬を行うことがなかったのは、エジプトやユダヤや中国のみであった。中国で、火葬を行われていなかった理由については、中国で信奉されている風水の思想が人々を火葬から遠ざけていること、火葬によって遺体を早く消滅させることを嫌ったことであると説明している。

中国や世界各地ににおいて火葬を忌避する思想があることを紹介する一方で、イギリスにおいて科学的な研究が行われていることを紹介している。イギリスにおいても火葬は宗教的な理由で反対を受けており、それは火葬が遺体に対する冒瀆であるという意見からであったと説明している [Daily Advertiser 1894/6/18]。

この講義では、火葬の利点について、公衆衛生特に伝染病拡大時に、火葬により拡大を防ぐことができるようになる」と説明された。かかる講義内容は新聞でも掲載されるなど、火葬に対する関心の高さをうかがい知ることができる。

6. 火葬をおこなう民族の存在

前述のように、シンガポールの墓制や火葬への移行の議論は、植民地政府と「華人集団」との対話によって成り立っている。それは、他の民族に比べ、圧倒的な人口割合であることとともに、華人の富裕層が大きな力を持っていたことが理由となっている。こうした、火葬に関わる公的な対話に現れることはなかったが、他の民族が火葬をおこなっていた事例がある。それは、インド系の住民、そして日本人であった。彼らの人口割合は、合わせても1割にみたないが、彼らは、同じ民族集団だけで火葬を行うだけでなく、他の民族集団にもその火葬場を提供し、シンガポールでの火葬の需要に応えていったのである。かかる火葬を望んだ人々の中には、火葬した後に、その遺骨を母国に送還することを望んだ人々も多い。インド系住民の中で、主にヒンドゥー教徒たちが遺体を火葬しており、インド系住民以外の人々も利用することができた。インド系の住民が火葬を行っていた場所は、シンガポール西南部にあるバシバンジャン

(Pasir Panjang) であり、火葬場として利用されていたものの、それは小屋や火葬炉などの施設をとみなわない野焼き場 (open-air cremation) であった〔西村1936:78〕。こうしたインド系の住民が火葬を行っていたパシパンジャンの火葬場は、日本人によって用いられた。著名な例は、1906年の二葉亭四迷の火葬がある。二葉亭四迷は、ロシアから日本への渡航中、洋行上で亡くなり、日本に遺骨を送還するためにパシパンジャンでの火葬が行われた〔坪内他編1909:16〕。また、1910年代には、日本人墓地で火葬炉を建設しており、少数ではあるが、火葬を行う人々が存在していたことも重要である〔拙稿 2015〕。そして、火葬をおこなう理由についても、火葬が遺骨の送還のために用いられていたことも、看過してはならないであろう。

彼らのような少数派の住民が火葬の需要に応える働きをしていたことは、第二次世界対戦後に行われるシンガポールの火葬化についての議論に影響を与えたものとして重要である〔The Straits Times 1946/9/12〕。

おわりに

これまで、19世紀末のシンガポールにおける埋葬や墓地、そして火葬の議論について見てきた。シンガポールの葬制に変革を迫った大きな要因は急激な人口増加に伴う土地問題や公衆衛生といった都市整備の観点であった。かかる都市整備においては、人口割合の大半を占める華人の墓地に関する慣習をいかに近代的な思想と折り合わせるかが重大な論点となった。華人においては、風水を始めとする彼らの墓地に関する信仰は非常に篤く、政府も彼らの要望を無視する訳にはいかなかった。華人の信仰では、風水によって埋葬地を決定し、土地を購入することになる。これらの華人の意見を代弁する人々は、シンガポールにおいて英語教育を受けた海峡華人であった。本論で見てきた通り、植民地政府の組織内においては、セア・リアンセアやタン・テックスーンのような英語と華語ともに堪能な海峡華人が、華人の代弁者となり、植民政府の官僚にたいては華人の思想や慣習を伝える役割を果たしている。

また、先行研究では、看過されてきた19世紀末の火葬の議論について見てみると、政府官僚が19世紀末にはすでに火葬についての議論を非公式の間ではあるが行なっていることがわかる。かかる火葬についての議論が、海峡植民地政府の官僚にとってすでに、知識として火葬の利点が共有されていたこと、また

華人たちの反発を予期していたことを表しており、20世紀初頭に始まるシンガポールにおける火葬化の議論が、かかる土壌で行われていたことは重要な知見である。

《参考文献等》

【略語表記】

RCRBBG (Report of the Committee Regarding Burial and Burial Grounds 1952)

PLCSS (Proceedings of the Legislative Council of the Straits Settlements.)

【定期刊行物及び新聞】

Daily Advertiser

Proceedings of the Legislative Council of the Straits Settlements.

Straits Chinese Magazine.

Straits Times.

Singapore Free Press.

『叻報』(Lat Pau)

【日本語文献】

大西青二 1980 「初期シンガポールの人口」徳島大学教養部『徳島大学教養部紀要』第15巻, 1-22頁。

篠崎香織 2001 「シンガポールの海峡華人と「追放令」: 植民地秩序の構築と現地コミュニティの対応に関する一考察」『東南アジア: 歴史と文化』(30), 72-97頁。

高棹健太 2015 「日本人移民と火葬: 戦前シンガポール日本人社会を事例に」東北大学大学院文学研究科宗教学研究室『東北宗教学』第11号, 57-81頁。
坪内逍遙・内田魯庵 1909 『二葉亭四迷 / 各方面より見たる長谷川辰之助及其追懷』易風社。

寺本健三 2006 「風水研究(3)『古本葬書』和訳(下)」史迹美術同致会編『史迹と美術』第76輯(6), 214-216頁。

村山智順 1931 (1979) 『朝鮮の風水』国書刊行会

- 渡邊欣雄 1994 『風水 気の景観地理学』 人文書院
- 山本博之 2008 「プラナカン性とリージョナリズム：マレーシア・サバ州の事例から」『地域研究』, 第8巻第1号, 49-66頁。

【外国語文献】

- Frost, Mark, Ravinder 2003 “Transcultural Diaspora: The Straits Chinese in Singapore, 1819-1918” , *Asia Research Institute Working Paper Series* No.10. National University of Singapore Asia Research Institute.
- Galloway, D.J., 1898 (1893) “The Sanitary Side of Cremation” *Transaction of The Straits Philosophical Society*, pp.40-43.
- Jose, Jim, 1998 “Imperial Rule and The Ordering of Intellectual Space: The Formation of the Straits Philosophical Society” , *Crossroads: An Interdisciplinary Journal of Southeast Asian Studies* Vol. 12, No. 2 (1998) , pp. 23-54.
- SAW, Swee-Hock, 1999 *The Population of Singapore*, Institute of Southeast Asian Studies, Singapore.
- Straits Philosophical Society 1913 *Notes Orientals* : Being a Selection of Essays Read before the Straits Philosophical Society between the Year 1893 and 1910, Kelly and Walsh, Singapore.
- Song Ong Siang, 1967 *One Hundred Year's History of the Chinese in Singapore*. Reprint of 1902 edition. Singapore: Oxford University Press.
- Tan Teck Soon 1898 “The Chinese View of Cremation” , *The Straits Chinese Magazine*, Vol.11 pp.81-84.
- Tan Teck Soon 1898 (1893) “The Chinese View of Cremation” *Transaction of The Straits Philosophical Society*, pp.44-50.
- Thomson, J, T 1865 *Some Glimpses into Life in the Far East*.
- Tong, Chee Kiong, 1988 *Trends in Traditional Chinese Religion in Singapore*, Singapore : Ministry of Community Development.
- Tong, Chee Kiong, 2004 *Chinese Death Rituals in Singapore*, Routledge Curson, New York.
- Turnbull, C. M. 1989 *A History of Singapore 1819-1988*, second edition, Oxford

University Press, Singapore.

Wilbert, Wong Wei Wen 2015 “John Turnbull Thomson and The Hikayat Abdullah” , *New Zealand Journal of Asian Studies*, Vol.17, pp. 95-117

Yeoh , Brenda S A 2003 *Contesting Space in Colonial Singapore*, NUS press Singapore.

【翻訳文献】

J.J.M. デ・ホロート 1986 「中国の風水思想－古代地相術のバラード」 牧尾良海訳 第一書房 = J.J.M. De Groot 1964 *The Religious System of China Its Ancient Forms, Evolution, History and Present Aspect Manners, Custom and Social Institutions connected therewith. Volume. III The Grave (Second half) Chapter XII* , Fung-shui Literature House, Ltd., Taiwan Republic of China.

タム・ソンチー 1989 『近代化と宗教－複合社会シンガポールの場合－』 設楽靖子訳 東南アジアブックス 勁草書房 = Tham Seong Chee 1984 *Religion And Modernization: A Study of Changing Rituals among Singapore's Chinese, Malays and Indians*, Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies.

【インターネットサイト】

シンガポール環境省ホームページ

National Environmental Agency, “Burial, Cremation & Ash Storage”

(<http://www.nea.gov.sg/public-health/care-for-the-dead/other-death-related-matters/burial-cremation-ash-storage>, 2016年12月20日閲覧)

イギリス火葬協会 ホームページ

The Cremation Society of Great Britain, “International Cremation Statics 2014”

(<http://www.srgw.info/CremSoc5/Stats/Interntl/2014/StatsIFhtml>, 2016年12月25日閲覧)

Dispute Regarding Burial Grounds and the Acceptance of Cremation in Late 19th Century Singapore

Kenta TAKASAO

In Singapore, the percentage of cremation is above 70% in 2014. It seems that most Singaporean have accepted the notion of cremation. However, the high cremation rated resulted from the long dispute regarding burial grounds and the acceptance of cremation between straits colonial government and Chinese community. In Singapore, the population of immigrants had grown rapidly since 1819. The population explosion set up the land shortage and hygiene problems. Straits colonial government begun the explanation about the burial ground, and the member of the government paid attention toward the necessity of acceptance of cremation.

In this paper, I tend to reveal that the reason why the dispute over Chinese burials and cremation begun in late 19th century and several straits-born Chinese played important roles on the dispute as representatives of Chinese communities.